多門院歴史探訪
（ロマンと哀愁をこめて）

多門院の将来を考える会
多門院長生会
じゃきりいわの会多門院支部
会長　新谷　一幸

■　大字多門院地区（4小字）

戸数　54戸（平成28年現在）

写真1　多門院橋から多門院地区をみる
（一番奥にそびえる山は、三国山）

写真2　小字多門地区

写真3　小字荒倉地区

写真4　小字材木（ざいもく）地区

写真５　小字黒部（くろぶ）地区

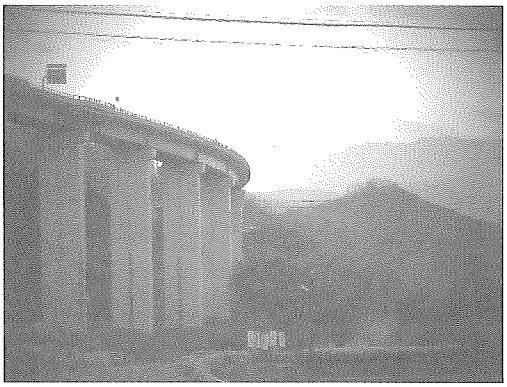


写真６　荒倉地区より高速道路を望む

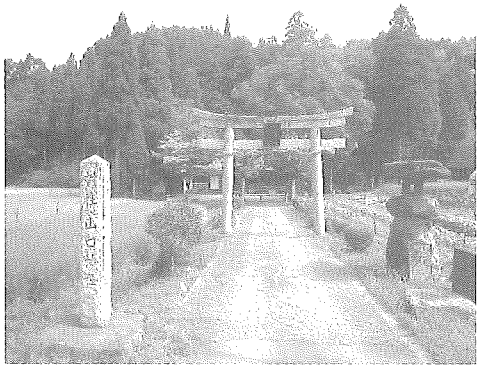


写真７　氏神　山口神社
（多門院と堂奥の氏神）

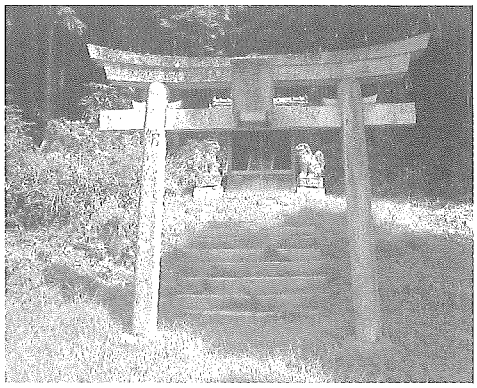


写真８　若宮八幡神社
（小字荒倉地区）

■　山口神社（多門院と堂奥の氏神）

＊祭礼は、10月第一日曜日。多門院と堂奥の交代制。
＊鰐口（明徳２年（1391））、修理棟札（康正２年（1456））等あり。「丹後風土記」残欠等に山口社表記あり。「山口坐祖母社（やまぐちにいますそぼしゃ）」又は「山口坐御衣知祖母神社（やまぐちにいますみそしりそぼじんじゃ）」
養蚕の神様（天道日女命（あめのみちひめのみこと））・山の神（大山祇神（おおやまつみ））を祀る。

写真９　長谷山　興禅寺（臨済宗天龍寺派）

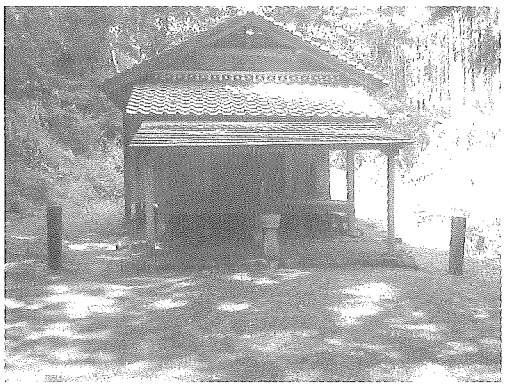


写真10　毘沙門堂

■　興禅寺　臨済宗　天龍寺派

＊創建不詳　天正元年（1573）再建　雲門寺末寺
＊元々は、真言宗だった。廃寺「胡麻寺」にあった「毘沙門天立像（国・重要文化財　平安時代後期　像高97㎝、桧一木造）」、「多宝小塔（市指定文化財　室町中期　総高91.5cm、一般建築と同等の精密さを持つ）」などを収蔵。
＊この「毘沙門天立像」は、左手に宝塔を持ち、右手には宝棒を持つ像で、眉、ひげ、髪に墨、唇に朱をさすほかは全く彩色をしない桧の素地作りである。顔に特異な抑揚をあらわし、とじた唇の間から歯だけを見せる姿は、他に類がなく、腹前で帯をかむ「獅噛」は、人面を呈している（普通は、獅子の顔が多い）。この像と鞍馬寺及び信貴山にある像は、一本の香木（桧）から作られたといわれている。また元和２年（1616）に伊勢の御師・慶龍に盗まれるが「多門院に帰りたい、帰りたいと毎晩泣いて寝られなかったので、返しに来た」という伝承もある（後述）。

写真 11　毘沙門天立像（興禅寺）

写真 12　同（拡大）

写真 13　獅噛が人面
（高知県雪蹊寺にある重文「毘沙門天立像」
桧寄木造、彩色も人面の獅噛を持つ）

写真 14　多宝小塔（興禅寺）

＊多宝小塔は一般的な建築様式を備え、精巧で均整がとれ、斗栱の組み方など複雑で本格的なつくりとなっている。この多宝小塔は、大檀上に安置するために作られた「壇塔」と呼ばれるもの。下部の塔内に収められた「歓喜天」は、象頭人身の姿をとる「坐像」で、我が国へは密教とともに伝えられたもの。

興禅寺毘沙門堂の仏たち

＊毘沙門堂には、国・重要文化財「毘沙門天立像」、市指定文化財「多宝小塔」の他に、2体の仏像がある。

＊釈迦如来坐像（像高 33.5cm、元和 8 年（1622）興禅寺復興時造像か）。右手は、掌を前に向け、左手は、掌を上にして膝前に置くという。「施無畏（せむい）・与願（よがん）」の釈迦如来通形の印をとる。

＊薬師如来坐像（像高 34cm、元和 8 年興禅寺復興時造像か）。釈迦像と同様の手に薬壺を持つ通形の薬師如来。どちらも寄木造彫眼で、衣部はベンガラらしい彩色が施され、肉身部には、金泥が塗られている。肉髻（にっけい・頭頂部のもりあがり）が高いことから、古様にならった江戸時代初期の造像とみられる。

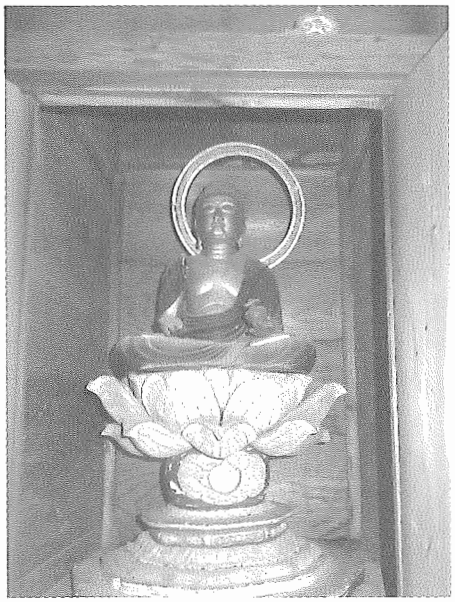


写真 15　薬師如来坐像（左）

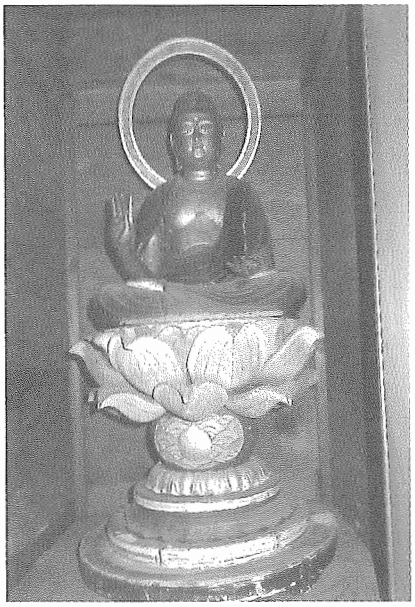


写真 16　釈迦如来坐像（右）

■　熊野権現堂

＊奉納されていた「人面狛犬」、舞鶴市小橋地区にある松原神社にも人面を持つ狛犬（大きさも同じくらい）

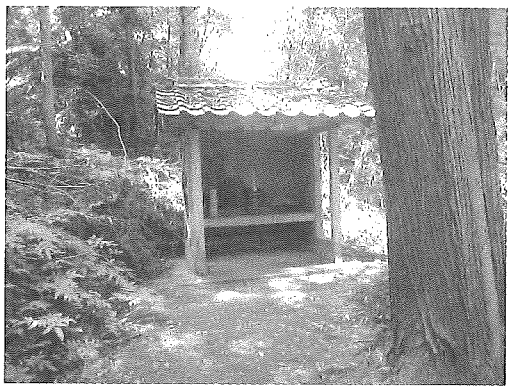


写真 17　熊野権現堂

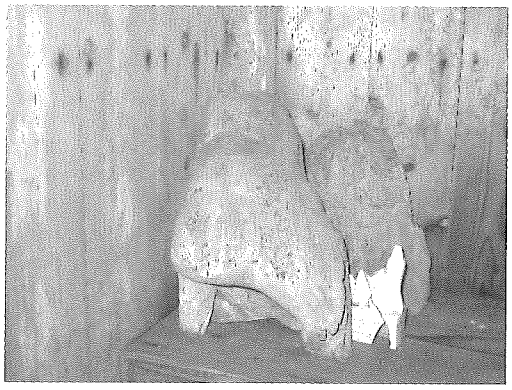


写真 18　熊野権現堂にある木造の「狛犬か？」

写真 19　人面狛犬

■　天蔵神社

＊「丹後風土記」及び残欠に標記のある「天蔵社」。祭神は、天香語山命（あめのかごやまのみこと）。山口神社の祭神・天道日女命（あめのみちひめのみこと）の子である。
＊元々は、現在地から 300m ほど北にある「ハシケ林」の頂上にあった。
＊残欠では「高橋郷（本字高椅）。高橋と称する所以は、天香語山命が倉部山（ハシケ林の事）の尾上に神庫（ほくら）を造、種々の神宝を収蔵し、長い梯（8 丈＝ 24m）を設けてその蔵の品を出し入れしたところから、高橋という。今なを峰の頂に天蔵と称す神庫（ほくら）があり、天香語山命を祀る」とある。
＊高橋郷（椋橋郷）の中心は、その祠があった「ハシケ林＝倉部山」であり、現在の浜・森・行永・与保呂を含む広域を有しており、「蛇切岩伝説」が、多門院黒部から与保呂・八反田（行永）・森と広域に広がる物語に符合する。
＊残欠には、倉部山の峰の頂に天蔵神社はあったと書かれており、ハシケ林は、峰とは言えず、ロマンチックに想像すると「三国山」の頂上に天蔵神社があったとは考えられないか。ロマンが尽きない。
＊新田施主と台座に銘がある「狛犬」高さ約 30cm も奉納されており、新田一族との関係も想像するとロマンと哀愁が漂う。重さ約 12kg、花崗岩。

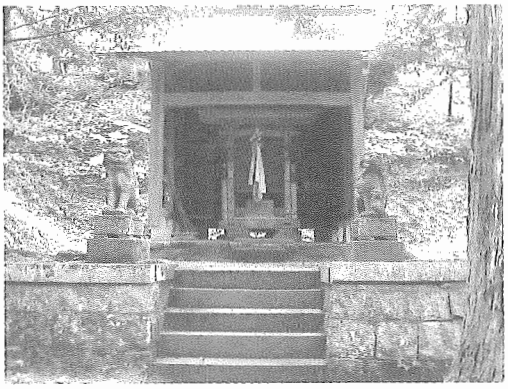


写真 20　天蔵神社

写真 21　「新田施主」の銘がある「狛犬」

■　延命地蔵堂（別名：黒部の辻地蔵）

＊延命地蔵菩薩半跏像（市指定文化財　平安後期　像高 88.5cm）を祀る。平安後期の美作として「丹後の錦」に掲載後注目を浴びる。
＊江戸時代後期及び大正期の修理で施された紙貼り、胡粉塗の為著しく尊容を損ねていたが、平成 11 年に彫刻当時の「素地仏像」として解体修理を行った。現在は、彫刻当時の穏やかで顔立ち優しい表情に戻っている。行基の作ともいわれている。

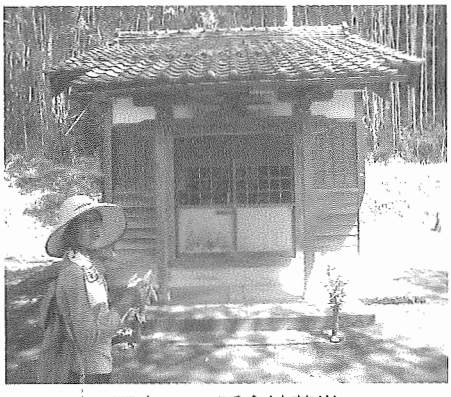
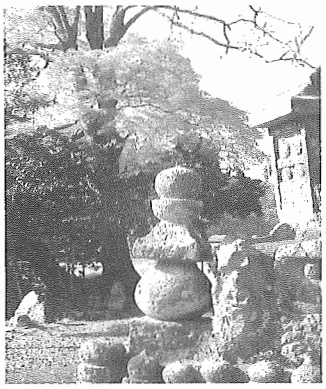


写真 22　延命地蔵堂

写真 23　延命地蔵菩薩半跏像



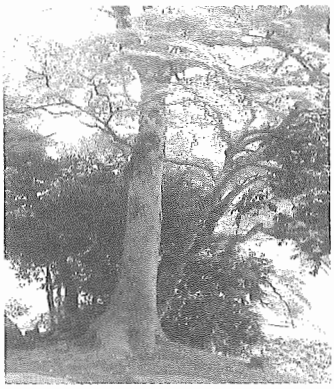


写真 24　夫婦紅葉（欅と紅葉が根元で合体）

■　延命地蔵堂境内

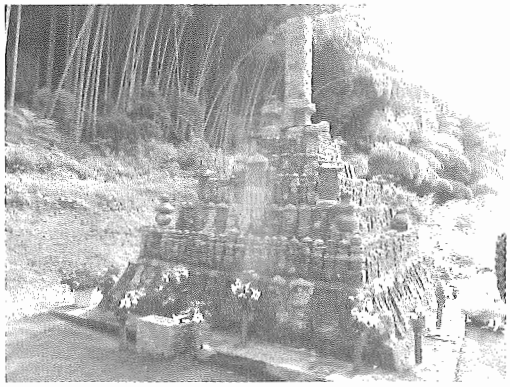


写真 25　無縁塔

写真 26　屋形屋根をもつ五輪板碑

■　無縁塔

＊昭和９年に当時の青年団が多門院地区内の石造物を集めて「ピラミッド状」に設置した。
＊四隅の「五輪板碑」は、空・風・火・水・地を表す五つの部分の中で、最下段の地輪が異常に大きく、その上の水輪と風・空は同じ幅で小さく作られ、火輪は一般の形である三角が著しく変形して、棒状に横に張り出している。離れてみると、十字に見え、「隠れキリシタン」の供養塔のように見える。この地区は、隠れキリシタンの里だったのか、はたまた逃げ延びてきたキリシタンの処刑を弔う板碑なのか、ロマン漂う空間である。

写真 27　仏たち

写真 28　仏たち

写真 29　延命地蔵菩薩半跏像の供養

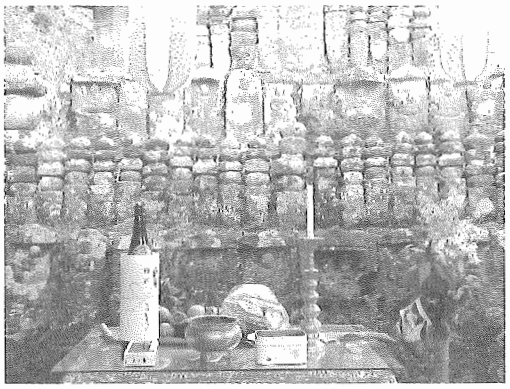


写真 30　無縁塔供養

■　地蔵盆

＊8月23日近接の土曜日に無縁塔供養を兼ねて行われる。祭事は、「黒部材木組合堂」という維持管理組織が、区所有の「無縁塔」を含め清掃、除草など一年を通じて管理を行っている。祭礼準備は、当日午前8時からその年の役員（副組長含む）と禰宜当番で行い、子供会父兄有志も手伝う。子供会の出店準備及び境内の清掃、提灯吊り、幟立てなど。禰宜宿は、主に堂内清掃及び飾りつけ、無縁塔前の祭壇造と花立を行う。祭礼は、無縁塔供養が午後6時から、その後延命地蔵菩薩半跏像の供養を行い、供養がすみ次第「直会（なおらい）」に移る。

＊子供たちは、出店に群がり焼きそば、フランクフルトなどを食べ、当て物に興じる。この日は、親戚などからも子供たちが集い、つかの間の「にぎやかい山里」になる。一年を通して当地区での最大の祭りとなり、地蔵盆が終ればいよいよ夏休みが終わりを告げる。多門院は、いつもの山里に戻り、稲刈りのコンバインの音が初秋を告げる。片付けは、次の日の午前9時から準備した時のメンバーで行う。

写真31　地蔵祭の出店

写真32　夜の出店

写真33　夜の地蔵祭

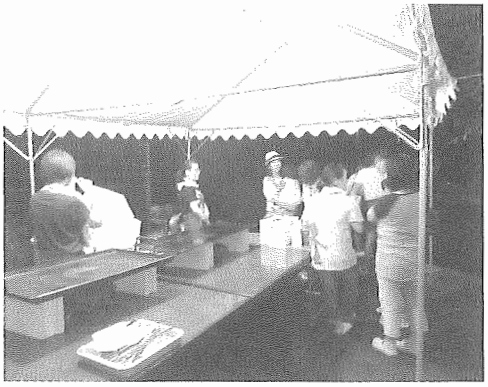


写真34　地蔵祭

■　自然石板碑（地蔵堂境内）

＊室町時代文明 16 年（1484）。自然石に彫刻された板碑では、舞鶴で一番古いらしい。
＊『舞鶴市史』各説編によると「大乗妙典前住永安菊翁（花押）文明十六甲辰年八月二十六日」とある。2 基とも同文が刻まれている。

写真 35　地蔵堂参道の両側の板碑

■　埋蔵金伝説

＊かつてこの地域には、この付近を中心に「落人たちの埋蔵金」が隠されていたとの伝承があり、「下三里上三里埋蔵金有」と言う言葉が伝えられている。この「下三里上三里の中心が「延命地蔵堂」付近とながく信じられてきた。昭和 52 年の地蔵堂の再建の時、堂下を掘ると「空洞」が現れたが、埋蔵金があったのか、誰かが掘った後なのか、いつの間にかなくなっていたとの事。
＊筆者の祖父達は、その周辺も掘り返したが、なにも出なかったという話はよく聞かされた。
＊この地蔵堂から約 500m 南に行くと、「池ノ谷」と言う地名がある。昔白馬に跨りし白髪の老人が、一駄の黄金をこの谷に埋めし事あり、それより誰云うとなく「イケが谷」といい、遂に池が谷と誤伝せしなりと。

写真 36　向かって右側の板碑

■　金鉱採掘場

＊明治期、ある人が夢枕に「金色の杉の木が芦谷川の畔にある。その下を掘れば金がある」と告げられた。そこを掘ると実際に金鉱が見つかった。しかし少量しか金は含有されず採算に合わない為、途中で中止したという。採掘中は、白装束に酒で体を清めてから作業したという。私は、子供の頃その場所に行って周りの岩がきらきら光り輝いていたので、金だと思い大喜びで持てるだけ持って帰ってくると、祖父にそれは「黄鉄鉱や。」といって笑われた思い出がある。

写真 37　向かって左側の板碑

その当時は（昭和30年代前半）、まだ滝壺のように掘った跡が鮮明にあったが、今はどうなっているか、行くすべもない。

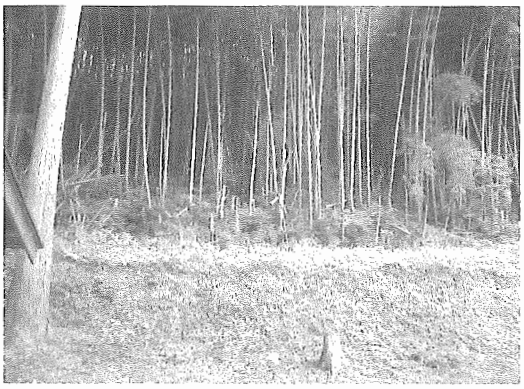


写真38　地蔵堂の裏山（埋蔵金伝説）

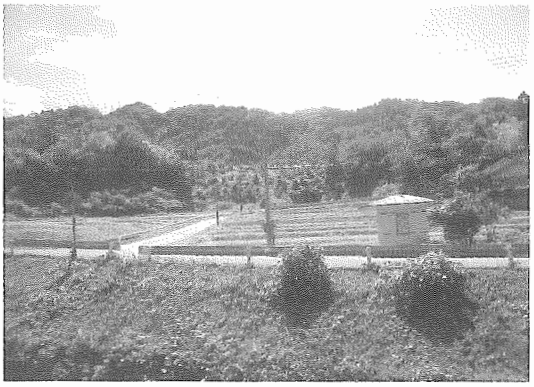


写真39　池が谷（埋蔵金伝説）

■　毘沙門天立像（黒部区）

＊毘沙門天立像（市指定文化財　南北朝期　寄木造　像高41.6cm　漆箔及び彩色玉眼嵌入（ぎょくがんかんにゅう））。至徳2年（1385）の銘が、仏像のホゾにある。当地には、「新田伝説」があり、新田義貞が非業の最期を遂げたのは、1338年で、約50年たって、やっと落人として落ち着き、この地を定住の地として「毘沙門天」を守護神として祀った可能性もある。この像の腹部の獅噛（しがみ）は、興禅寺の国・重要文化財の「毘沙門天立像」の獅噛と比べてみるのも面白い。

写真40　毘沙門天立像木造

■ 版木

＊黒部集会所に「牛玉宝印（ごおうほういん）」の版木がある。相当古く、使い込まれたその版木には「寛文十年（1671）戌十二月日、願主鹿原山橋本坊、作者宥（カ）識房」の銘が側面にある。
＊舞鶴市教育委員会社会教育課神村氏によると、正面は「牛玉　想楽寺　宝印」、裏面は「牛玉　米穀寺　宝印」と読める。また、「橋本坊」は、鹿原の金剛院の中にあった支院である。なぜ多門院にあるのかは定かでない。昔の言い伝えでは、多門院は金剛院の伽藍の一部だったという。それとも胡麻峠の近くにあった真言密教寺院「胡麻寺」の支院の可能性もある。

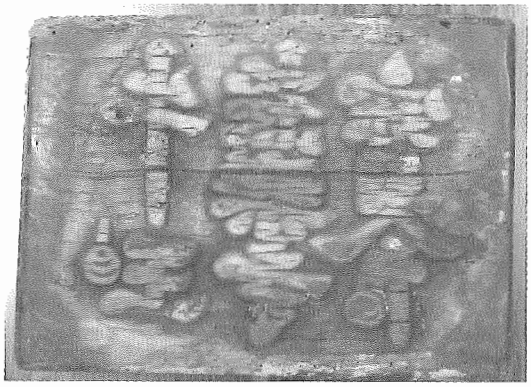


写真 41　版木正面　想楽寺

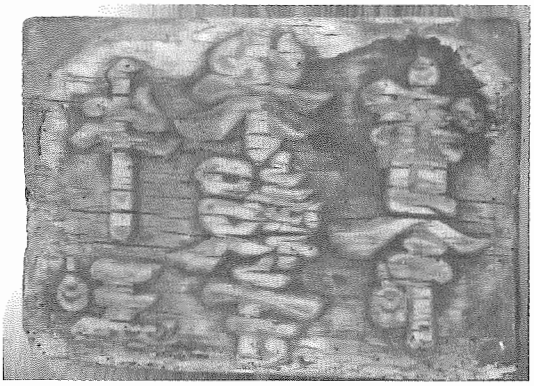


写真 42　版木裏面　米穀寺

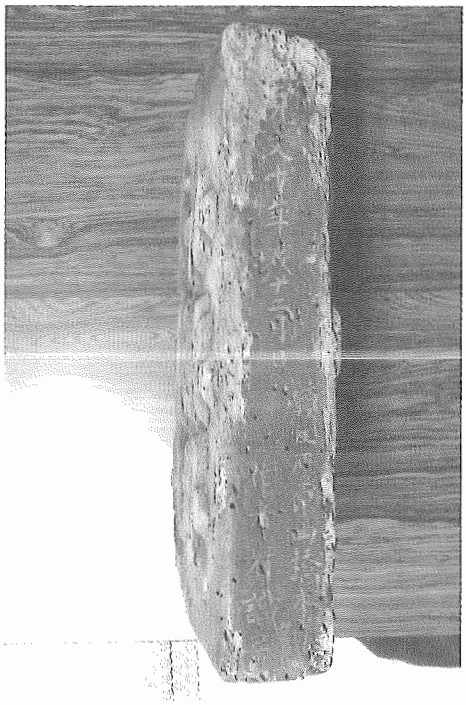


写真 43　版木側面

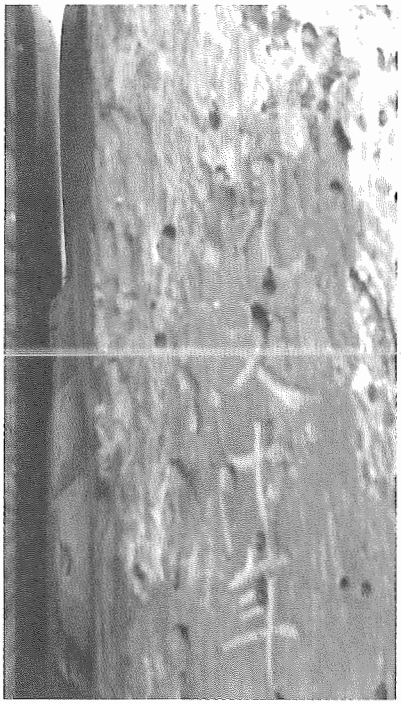


写真 44　版木側面拡大

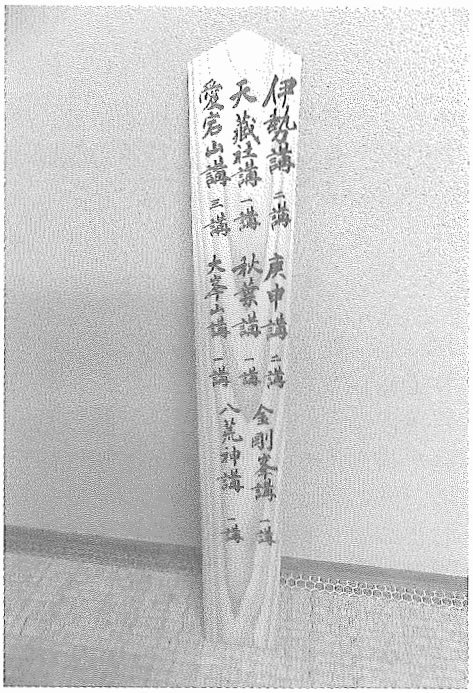


写真 45　合社講札（表）

写真 46　合社講札（裏）

■　合社講札

＊黒部区は、明治 37 年旧正月、伊勢講、庚申講など講の数が多いので、小字総会の協議により合社講と決定した。

■　温泉伝説

＊小字多門地区の「湯が谷」という所に、昔温泉が湧いていたという。そのお湯は、茶色ですこぶる塩梅がよく、地域では貴重な温泉であった。ところがある日、その温泉でおしめを洗ったものがいて、温泉の神様が激怒し湯を有馬に持って行ったそうである。この湯が谷では、温泉は止まり、有馬では「有馬温泉」として繁盛している。

■　帰ってきた毘沙門天（興禅寺　国重要文化財「毘沙門天立像」）

＊ 1616 年のある日、伊勢の御師・慶龍（けいりゅう）が「多門院には立派な仏像がある」と聞きつけ、村へやって来た。お札を売り歩きながら仏を探し歩き、興禅寺で毘沙門天像を見つけた。村人と和尚がいなくなったのを見計らって像を盗みだし、伊勢に逃げ帰ったという。その日の夜。慶龍は部屋の棚に置いて眠りについたが、ガタガタと棚が揺れる大きな物音で目を覚ました。見ると毘沙門天像が震えており、そのうち「早う多門院へ帰りたい。多門院へ帰りたい。」と言いながら枕元へ下りて来た。翌日からも毎晩同じことが起こり、怖くなって数日後、寺に像を返しに来た。
＊別の言い伝えもあり「代官の辻本与右衛門親子と村人たちが、慶龍を追い求めて伊勢に行き、6 年後にとりかえしてきた」という。

■　密教系寺院「胡麻寺」

＊三国山胡麻峠の多門院黒部よりの平坦地に「胡麻寺」があったといわれている。寺は、七堂伽藍を配す大きな寺で、そこにあった「阿弥陀如来三尊」の３体は、行永の龍勝寺へ、「毘沙門天立像」は多門院の興禅寺に祀られたという言い伝えがある。

■　蛇切岩伝説

＊むかし多門院の黒部に「おまつ（姉 18 歳）」「おしも（妹 15 歳）」という美しい姉妹がいた。働き者の姉妹は、与保呂奥の池のほとりで毎日芝草を刈っていたが、ある日見かけない若衆（美少年）が現れた。おまつは若衆にひかれ、二人きりで語り合う仲になった。ちょうどおまつには、親が勧める縁談が持ちあがったが、おまつははっきりした返事をしなかった。ある日、妹のおしもは、池のほとりで、おまつを待つ若衆を見て、二人の仲に感づいた。恋心を知られたおまつは、家に帰るのを拒み、池に身を投げた。池からは大蛇が出現し、悲しそうな眼をしながらすぐに池の中へ姿を消した。村では、おまつの化身の大蛇が暴れるのではないかとの噂が広まり、村人たちは相談し、牛に模したモグサに火をつけて池に投げ込んだ。モグサを飲み込んだ大蛇は、激しくのたうち回り、遂に池の水はあふれ、洪水と成って大蛇と共に下流へ。大蛇は、途中大岩にあたり、三つに断ち切れた。たたりを恐れた村人たちは、頭部を「日尾池姫神社」に、胴体を「堂田の宮（八反田）」、尾は「大森神社（尾守り神社）」にそれぞれ祀った。それ以来、日尾池姫神社周辺には、松の木は生えなかったという。
＊多門院から与保呂、八反田、森と広範囲に展開する「伝説」は、珍しく、高橋郷（椋橋郷）がこの地域に広がっていた証と言えないだろうか。

■　きつねがえり

＊小字多門地区で近年まで続いていた「行事」。一晩中、村の青年たちが、宿に集まって夜中に、近所の家々を回って、住みついたきつねを追い出すという。

■　ハシケ（キ）林（残欠：倉部山と表記）

＊ハシケ林（残欠：倉部山）は、古代ロマンの塊の山である。高速道路建設時、盛土用の土として掘削され現在の山容となっているが、「丹後風土記」などにある「天蔵社」は、この山頂に立っていたという。
＊高い梯子（高橋＝高梁）を使って参拝したという。一説に８丈（24m）もあったらしい。「この山を倉部山と言い、この頂上に長い梯子を昇って出入りする「神庫（ほくら）」があり・・・」とある。
＊古老曰く「昔は、この山を倉部山（くらべやま）といい、高い梯子で昇ると社があった。いつの程からか、南の方に移動していた。そこには、立派な鏡がご神体として祀ってあったが、それもいつの頃からか無くなっていた」という。
＊掘削時に「発掘調査」を行ったところ、「経塚」としての壺や小銭が出てきた。
＊現在は、下段が「ゲートボール場」として、中段は、将来「公園」として整備するため、桜やイロハ紅葉などを子供会や老人会（多門院長生会）合同で植樹している。周辺除草（草刈り）は、現在年３回長生会で行っている。

写真 47　午後 7 時出発

写真 48　荒倉地区

写真 49　納め火

■　伝統行事「稲の虫送り」

＊ 2013 年に 60 年ぶりに復活。昭和 28 年 13 号台風により当地区は、壊滅状態の被害を受け、その後「振り物」や「杓子舞」「神楽」等の祭りは早くに復活したが、「稲の虫送り」行事は、なかなか復活できなかった。現代の良く効く「農薬」の為、必要のなくなった「行事」だからである。しかし 2013 年の長生会（多門院地区老人会）で子供たちに昔あった地元の行事を伝えていくことにより、地元古里に興味と誇りを持ってもらおうと復活させた。大人用の「大松明」は、長さ約 3 m、重さ約 10 ～ 15kg、子供用「青竹松明」は、長さ 1.2m 程度を、前日までに長生会有志で製作。7 月第 1 土曜日の「本番」は、午後 7 時黒部地区を出発。農道などを巡りながら、材木地区で材木ルートと多門ルートに火を受け継ぎ、荒倉地区で合流し多門院橋まで先頭の「鉦」をたたき、「い～ねのむ～し　お～くろや。ひょうたんたたいて　お～きのしままで　お～おくろや」と大声で叫びながら、子供たちを交えて大行列。多門院橋で「納め火」。今年も豊作でありますようにと祈る。

■　愛宕神社祭礼

＊毎年 7 月 15 日前後の日曜日。朝 8 時に小字黒部及び小字材木地区住民（各戸 1 名出席）地蔵堂前に集合し、各組毎に参道清掃、地蔵堂清掃、天蔵神社下榊周りの除草作業をし、10 時半ごろ「愛宕神社」境内に集合する。禰宜宿は、当番制で 2 名づつが境内清掃及び堂内、祭壇を清掃し榊、塩、洗米、聖水、お酒、トマト（人数分）をお供えする。

＊その後、「般若心経」を三願唱え、直会（なおらい）に移り、禰宜は、洗米及びお神酒を参加者に配る。トマトを肴に宴会とするが、緊急に決めなければならない議題があればその場で報告、決議する。

＊肴が「トマト」なのは、火伏せの神様なので、「赤い色のトマトを火に見立て、食

い尽くしてしまう」の意味があるという。また赤い色のものを食べつくすのには「魔除け」、「魔伏せ」を意味する。

■ 山の神祭礼

＊毎年12月初めの土曜日。午後5時ごろに黒部地区住民は、山の神祠に集合。当番は、御幣を忍竹（長さ20cm程度）に挟み、通年は12本、閏年は13本を前年度の物と取替える。洗米、塩、お神酒、ジャコなどを供え、「般若心経」を三願唱える。先に前年度の御幣とわら一束を燃やし、「社が燃えとるぞ！！　早う帰ってきんなせー！！」と大声で叫ぶ。
＊その後、集会所に戻り、「火の用心」の夜回りをしてくれている黒部子供会の子供達にお礼の「食事会」を合同で行っている。
＊子供会の夜回りは、明治4年(1871)の「黒部大火災」後、途絶えることなく続いている。この夜回りは、当初(明治4年ごろ)は戸主が順番に回っていたが、昭和に入って子供会に引き継がれて現在に至っており、平成25年度に「善行表彰」されている。

■ 天蔵神社祭礼

＊毎年9月15日前後の日曜日。黒部地区及び材木地区の住民が、午後1時半より境内周辺及び境内下榊周りの除草作業後、祭礼として般若心経三願唱えて、洗米、お神酒の払い下げを受ける。当番禰宜は、2名でお堂周辺を清掃し、塩、洗米、お神酒、聖水をお供えし、祭礼が始まる前にろうそくに火をともし待つ。心経が終りお神酒などを頂いた後、黒部材木組合堂総会として会計が発注した料理折を頂く。会計は、半期分の「会計報告」を行い、決議事項があれば組長代表は、議題を提案し議決する。

■ 山口神社祭礼

＊祭礼の詳細は、京都府立大学文化遺産叢書第11集『舞鶴地域の文化遺産と活用』に掲載されているので参考にされたい。

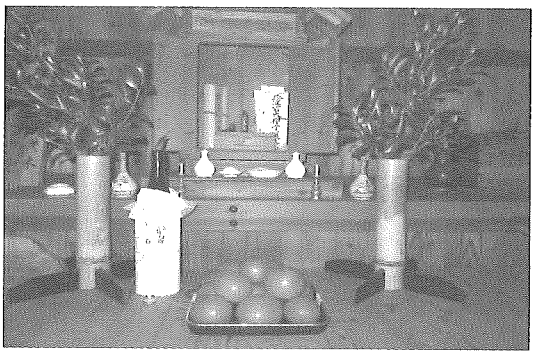


写真50　愛宕神社

写真51　山の神

写真52　山の神祭礼

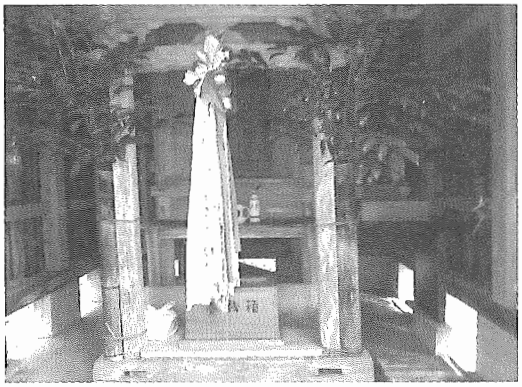


写真 53　天蔵神社

写真 54　天蔵神社のお供え

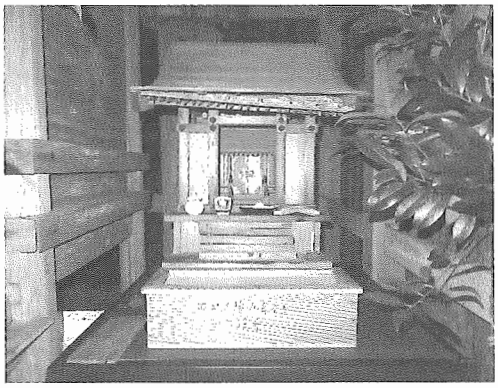


写真 55　脇にある「小宮さん」

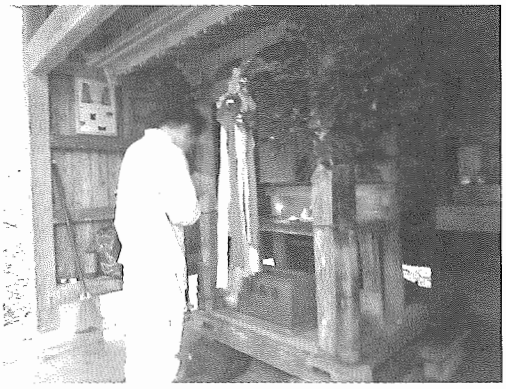


写真 56　天蔵神社祭礼

写真 57　ハシケ林全景

写真 58　中段部大岩（掘削でむき出しになった）

■　荒倉地区地蔵と常夜灯

＊荒倉地区の集会所横に常夜灯と童女の地蔵がある。昭和 28 年台風 13 号で多門院地区は、未曽有の被害にあったが、この荒倉川近くにあったにもかかわらず現在地を守っている。以前の常夜灯は、当番制であったが現在は、電灯でタイマー（又はデイライト式）となっている。多門院地区には、各小字毎に常夜灯が有ったが、台風 13 号で流失し、現在は、材木地区とこの荒倉地区にのみ残っている。特に黒部地区の常夜灯は、笠石の大きさは、畳一枚分近くあったといわれている。

写真 59　常夜灯と童女地蔵

写真 60　童女地蔵

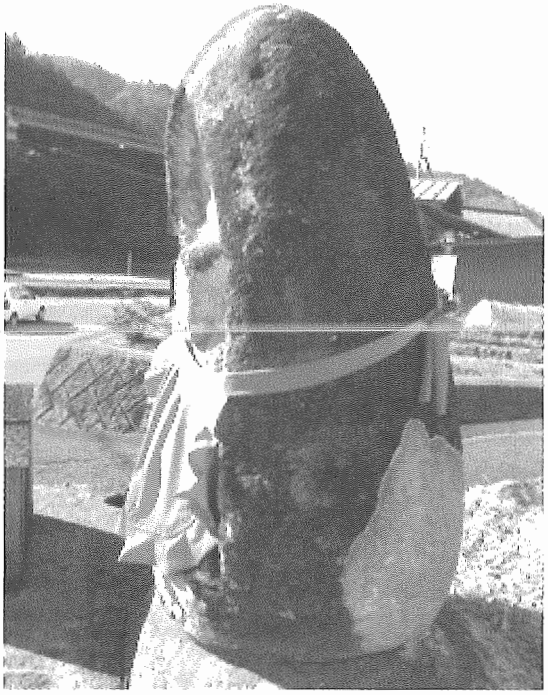


写真 61　嘉永 7 年（1854）銘

写真 62　左横「恵恩童女」

■ 「多門院歴史探訪ウォーキング」開催

＊子供会と多門院長生会とが合同で「多門院歴史探訪ウォーキング」を開催し、多門院地区に残る旧跡や伝説地を探訪した。子供たちに地区の歴史や旧跡、伝説を直接感じてもらい、「郷土愛」をはぐくんでもらい、将来地元に帰って来てもらいたい、そんな気持ちで企画した。平成 29 年度は 7 月 30 日に実施。

写真 63　多門院歴史探訪ウォーキング

写真 64　解説の様子

＊参考文献

1．『倉梯村史』坂本蜜之助　昭和 8 年

2．「松本節子の舞鶴・文化財めぐり」祖母谷の文化財　松本節子　『舞鶴市民新聞』

3．「ふるさと昔語り」第 93 話（戻ってきた毘沙門天）『京都新聞』

4．「ふるさと昔語り」第 237 話（与保呂川と蛇切岩）『京都新聞』

5．「社寺明細取調書綴」　多門院村戸長役場　明治 16 年 6 月

6．『多門院の歴史と文化財』　松岡徳二　平成 16 年（自費）

7．『行永史』　元字行永会　平成 21 年 12 月 24 日

8．京都府立大学文化遺産叢書第 11 集『舞鶴地域の文化遺産と活用』東昇編　平成 28 年 3 月

表紙の解説

5 （裏）	1　2　3 4 （表）

1　丹後風土記残欠倉部山＝高梯郷の中心地
（舞鶴市多門院字梯木林）新谷一幸氏撮影
2　大宮売神社旧本殿の調査風景　近藤史昭氏撮影
3　稲の虫送り（舞鶴市多門院）新谷一幸氏撮影
4　舞鶴湾口から青葉山など東地域の山　松岡秀雄氏撮影
5　京丹後市大宮売神社の境内　菱田哲郎氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書（2008～）

1　南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
2　近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報
　－御用日記・諸願控の総合的研究－
3　八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図―地域文化遺産の情報化―
4　八幡地域の古文書・石造物・景観―地域文化遺産の情報化―
5　丹後・宮津の街道と信仰
6　城陽市域の地域文化遺産－神社・街道の文化遺産と景観－
7　熊野の信仰と景観－宗教遺産学の試み－
8　石見銀山域の歴史と景観－世界遺産と地域遺産－
9　和束地域の歴史と文化遺産
10　八幡・南山城地域の寺院資料と信仰－京都府歴史資料調査－
11　舞鶴の文化遺産と活用
12　「丹後の海」の歴史と文化
13　古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的研究

京都府立大学文化遺産叢書　第14集
舞鶴・京丹後地域の文化遺産

編　集　東　昇・菱田　哲郎
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日　2018年3月30日
印　刷　サンケイデザイン株式会社
〒603-8165　京都市北区紫野西御所田町14番地2